

何でもわかる

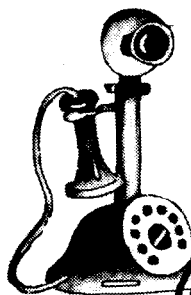
ことばの

百科事典

何でもわかる

ことばの百科事典

平井昌夫 著



三省堂

昭和49年3月15日 初版発行



何でも
わかる ことばの百科事典

昭和53年11月20日 第12刷発行

©
著者 平井昌夫

発行者 株式会社三省堂 代表者上野久徳

発行所 株式会社三省堂

〒101 東京都千代田区神田神保町1の1

電話 東京(63)293-3441(代)

振替口座 東京 6-54300

<ことばの百科・608pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ま え が き

・言語に対する関心が世界全体に高まってきました。日本も例外ではなく、言語の問題が人びとの注意を引くようになっていきます。情報化時代を迎えて、コミュニケーションのもっとも有力な手段である言語の機能についての再確認や再検討が社会的な要望となったものと考えられます。

わが国では、こうした一般的な気運とともに、一部の人びとにみられる日本語の誤用や誤字や乱雑な敬語使用などから、日本語の混乱やコトバの乱れといったことが大きく取りあげられるといった傾向もあります。そして、実生活をなめらかに送るのに必要な現代日本語の知識が身につけていないのではないだろうかという疑問を表明する人もふえています。

これまでは、国語の愛護といった抽象的なスローガンは叫ばれてきました。その対策としては、せいぜい古典国語や漢文をもっと読ませるか日本語は情緒的な性格であるとか漢字の数や音訓の範囲をもっとふやせとかといったことしか言われていません。現代の日本語は全体的にどういうものなのか、それを合理的・能率的・効果的に使いこなすにはどうすべきかといった具体

的な提案はほとんど出されていません。そのためか、学校生活を終えて社会人となった人たちは、それぞれの企業体で現代日本語の使い方についてのいくつかを即席に研修させられるということになっていきます。

本書は、高等教育を受けて社会人として活躍する人びとのために、現代日本語についてこれだけは知っておかなければならない基礎的な知識や常識を要約したものです。いわば社会人のための現代日本語のミニマム・エッセンシャルズ（最少必要量）を集めたものです。なるべく多方面にわたる必要から、記述をできるだけ簡略にし、項目列挙のまとめ方を取りました。まとめてみますと、現代日本語もこれだけ多方面にわたる基礎知識になっていますから、現代の社会人として要求される効果的な言語生活を送るのはなみなみの努力ではできないことが知られ、現代日本語を根本から洗いなおす必要もあるのではないかと考えられます。

本書はまた、現代日本語についての全面的な知識と社会的な機能を急ぎ身につける人には便利なハンドブックになります。断片的な知識に補修を加えたい人には体系的な見通しをつけてくれる手引き書になります。実務についている人には座右におく実務指針となります。個人の教養書としてはもちろん、グループの研修用テキストとしても活用されますし、生涯教育の学習書としても役に立つでしょう。また、大学入学試験や入社試験への現代日本語の知識の整理用としても利用されましょう。

現代の社会人のための手ごろな現代日本語百科として活用され、公私の言語生活をよりいっそう効果的なものにされることを希望して、本書のまえがきとします。

一九七三年十二月

平井昌夫

目次

第一部 現代日本語の知識	1
一 言語と文字	2
① 世界の言語と文字	2
言語が使われている実情	世界のおもな語族
世界の文字	
② 言語の機能と言語の種類	9
言語の機能	言語の種類
二 現代日本語	14
① 現代日本語の特色	14
外国語との比較	
② 方言・標準語・敬語	17
方言	標準語
敬語	
三 話しコトバ	26
① 話すことの機能	26

	話すこと 話すことの機能	
②	話しコトバ	27
	話しコトバ 話しコトバの性質	
③	話しコトバの要素	31
	母音 子音 特殊な発音 メロディー	
	四 書きコトバ	33
①	書きコトバと漢字	38
	言文不一致 漢字 漢字の音訓の整理 かな	
②	文 体	49
	文体の種類 口語体と文語体	
	五 語 彙	53
①	語 彙	53
	語彙の成分 語彙の数	
②	単 語	58
	単語の移り変わり 単語の意味 類語と反対語 慣用語 単語の作り方 単語の分類	
③	熟 語	67

熟語の組み立て方 歴史的な熟語

④ 社会の中の単語 73

新語 流行語 外来語 隠語

六 表記法 83

① 文字の使い方 83

正書法 左横書き 数字の書き方 外来語・外国語の書き方

② かなの使い方 93

五十音の表記 ひらがなで書いたほうがよい単語 漢字とかなを使い分けした方がよ

い単語 かたかなで書く単語

③ かなづかい 98

かなづかいの移り変わり 現代かなづかい 現代かなづかいの要領

④ 送りがな 104

送りがなの移り変わり 新しい送りがなのつけ方 改定送りがなのつけ方の要領

⑤ くぎり符号とくり返し符号 112

第二部 用字の常識 117

一	まちがいやすい漢字用法	115
①	よく書きまちがえる漢字	118
②	読みあやまりやすい漢数字	124
二	重要な難読漢字	127
①	一般に使われている難読漢字	127
②	地名に使われている難読漢字	152
	現代の難読地名 難読の旧国名・旧地名	
③	重要書き取り漢字七百題	159
④	新しい漢字用法	175
	当用漢字でおきかえる例 かな書きにする例	
第三部	用語の常識	189
一	まちがって使われているコトバ、まちがいやすいコトバ	190
二	区別のまぎらわしい一般社会語	207
三	区別のまぎらわしい同じ読みの単語	221
四	注意を要する単語	238

①	読みが違ふとニュアンスや意味が違ふ単語 ニュアンスが違ふ程度の単語 意味が違ふ単語	238
②	おもな反対語・対照語 漢語 和語	244
③	物の単位を表す単語	251
④	知っておきたい略語	254
⑤	敬語の使い方 職場の敬語の方針 皇室関係の敬語	255
五	必要な外国語・外来語の常識	260
①	あやまりやすい外国語・外来語	260
②	外国人にわからない外国語・外来語 日本で短縮した外来語 日本製の外国語 意味が変わつた外来語 発音が変わつた外 来語 語形が変わつた外来語	262
③	知っておきたいアルファベット語	274
六	重要な四字の熟語	280

第四部 コミュニケーションの技術

一 コミュニケーションの能力

① 言語とコミュニケーション

コミュニケーションと言語 コミュニケーションの過程

294

② コミュニケーションの内容のまとめ方

内容の組み立て方 主題の出し方

300

③ 述べ方

描写する述べ方 説明する述べ方 議論する述べ方 説得する述べ方

303

④ 語句の選び方と使い方

語句を選ぶ基本 使うときに注意する語句

310

二 話し方

① 話し方と聞き方の基本

話し方の原則 よい話し方 話す態度 聞き方の原則

315

② 対話のしかた

対話の基本 対話のマナー あいさつの話し方 紹介と自己紹介 面接の話し方 指

324

図の話し方 ハンディー・トーカーによる話し方

③	電話による応対のしかた	334
	電話応対の特色 電話のかけ方 電話の受け方 取りつぎのしかた 電話による応対のエチケット	
④	大ぜいの人びとへの話し方	344
	大ぜいの人びとへの話し方の基本 報告・発表の話し方 朗読のしかた マイクロホンによる話し方	
⑤	話し合いのしかた	354
	話し合いの特色 話し合いでの話し方 話し合いの司会者	
⑥	会議のしかた	362
	会議の特色 会議での話し方 会議の議長	
三	文章の書き方	368
①	わかりやすい文章の基本	368
	わかりやすい文章の書き方 原稿用紙の使い方	
②	文章を書く基礎技術	373
	文の作り方 段落の作り方 表現の強め方 文章の書き出しと書き終わり 推考の基準	

第五部 社会人の言語教養

一 和漢洋名数要覧

426 425

[3] 記録的な文章の書き方

リポートの書き方 記録文の書き方 日記・感想文の書き方 メモの取り方と個条書きのしかた

382

[4] 伝達・説得的な文章の書き方

論文の書き方 説明文の書き方 報道文の書き方 PR文の書き方

388

[5] 日常の手紙の書き方

日常の手紙を書く要領 日常の手紙の形式 封書の書き方 はがきの書き方 電報文の書き方

401

[6] 実用の手紙の書き方

実用の手紙の基本 実用の手紙の形式 実用の手紙の書式 実用の手紙の要領 テレタイプ・テレックスの文章

407

[7] 公用文・事務文書の書き方

公用文 事務文書 履歴書 届書 願書 委任状

416

二	ことわざと名言	441
①	民衆の生活の知恵 江戸・京・大阪対照いろはがるた	441
②	社会人としての覚えておきたい名言	444
三	おもな文学作品とその作者	450
①	現代日本のおもな文学作品名とその作品	450
②	世界のおもな文学作品とその作者	457
③	おもな文学作品の書き出しと有名な部分	465
	おもな古典作品の書き出し おもな現代の文学作品の書き出しと有名な部分 おもな	
	詩歌	
四	有名な作中人物	473
五	よく知られていることわざ・慣用語・故事成語	493
六	ユーモア辞典	540
	索引	586
	付録 1	559
	付録 2	555

現代日本語の知識

第一部

1

世界の言語と文字

言語が使われている実情

世界にいくつの言語があるかという調査は、調査不能な未開地があることや方言なのか異なった言語なのかの認定に困ることなどから、正確な結果はまだ発表されていません。フランスの学士院の推定では、世界に二、七九六種の言語が使われているとしています。アメリカの言語学者グレイもその

一 言語と文字

著書『言語の基礎』(Louis H. Gray, *Foundation of Language*, 2nd ed., 1950.)で、この数字を紹介しながら、自分が別な立場で調べても同じ数字になったとしています。この数字の中にはすでに今日では使われなくなったものも入れていますから、ふつうは二、五〇〇種くらいが使われていると考えればよいでしょう。

少数の一種族だけに使われている言語もあれば、たくさん民族やいろいろな国で使われている言語もあります。もっとも多くの使用者をもっているのは中国語(中国の公式発表では、一九七〇年現在の人口は六億九千七百二十六万人ですから、およそ七億人)、その次が英語(二億五千万人)、その

次がロシア語(一九七三年の公式発表では二億五千万人)です。国際的に最も広く使われているのは英語です。

一つの国に一つの言語であれば理想的ですが、そうしたことは比較的少なく、二つ以上の言語を公用語(official language)——その国として公式に用いる言語——とする国がかなりあります。その国の公用語をその国家の正式な言語という意味で国家語とか国語ということもあります。スイスでは、ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語(ラテン語から変わってきた方言)の四つが国語となっています。ベルギーでも、フラマン語(オランダ語の方言)とフランス語が公用語ですが、ドイツ語も使われています。自分たちの民族語を公用語にするかしないかで言語戦争まで起きています。インドはその有名な例です。

一つの言語がいろいろな国で使われ